

メディア時評

(9月)

山田健太

自らの地位を守るため、政権批判を封じ込めるのは普遍的な手法だ。古典的には権威によって、為政者が気に食わない言動を徹底して取り締まり、世の中に流通しないようにしたものだ。現代では、硬軟を使い分け、強力な情報コントロールによって、よりスマートに同じ効果を生み出す工

夫がなされるが、その術に、とりわけ長けていたのが安倍政権であった。熱狂度からすると小泉劇場のワンフレーズ・ポリテックスだが、安倍政権は安倍の覇権はまさにいま、政権に軍配があがる。そこに批判的な識者や有名人の首相辞任を要請する発言に対し、失礼だとか礼節を欠

くこの批判が集中している。今日的現象から、読み解くことができた(3日付本紙連載「最長政権の終焉」への寄稿も参照されたい)。

肩入れ

第1段階は、「親」メディア作りだ。日本の戦後ほど大きく、保守と革新にメディア地図が分かれていたが、政府の個別の政策につ

安倍メディアの8年

けた強力な情報コントロールが大きな特徴であった。政治とメディアの親密化は、両者の距離の問題にとどまらず、メディア、とりわけ新聞やテレビ全体に対する、一般市民からの強い不信感が一般化するようになった。

次に起きるのは、社会の「分断」だ。リアルでもネットでも、政権に反対する

ト言説が広く定着し、「歴史の書き換え」が進行する事態を生んでいる。

忖度社会の完成

首相が国会の場で発言して特定新聞を「捏造」と断り、国会議員が「潰せ」といふことに、社会が喝采を送るという構図を生むことになった。あるいは首相自ら、こうした対立を生む攻撃的言動を言論の自由と称することで、ますます自由の意味が歪められる

社会全体の自由の可動域を狭めることにも直結する。同時並行して、社会全体に強い者、声の大きい者に「忖度」する動きも顕在化するようになる。具体的には、政府方針と異なる可能性のあるものは、テロ行為だ、市民集会もあれ、市民集会もあれ、さらには美術館や博物館の歴史においてすら、やめておこうという力がどんどん大きくなることだ。

これまで、自由のルールは加速度的に回

作用するという循環を生んできた。

表現規制立法

こうした状況を下支えしたのが、新たな法制度の導入や運用の変更だ。特定秘密保護法、「共謀罪」法、盗聴法改正、ドローン規制法と、恣意的な運用によって取材の自由を脅かすことになった。憲法改正手続法や国家安全保障関連法にも、報道の自由を脅かす仕組みが含まれている。さらには、マニフェスト法や個人情報保護法の改正によって、市民の権利はむしろ縮減されたという見方も可能だ。そもそも、直接的に言論の自由を規制する条文を含む法律が、これほど短期間に集中して制定されたのは戦後初めてである。

同時に、既存の法律を解釈変更して別の運用を可能にするものもこの政権の大きな特徴であった。とりわけ放送分野においては、放送界の自主規制機関であるBPOの解散を断り、法解釈を変更し閣議決定で固定化、さらには個別具体的な折議や要請を繰り返して放送局を逐一締めつけていった。ちなみにこれを主

政府批判を「偏向」視

社会分断し政権盤石に

いては是非々々で対応する傾向が強かった。しかし現在は、すっかり親政権と反政権に色分けされるようになった。そしてメディア間においても、政府方針に反する論調を「国益毀損」と断る状況になっている。当然、政権も親メディアに肩入れする。

安倍政権は森友・加計問題以降、政権の私物化という批判を浴びたが、それ以前からメディアの私物化ともいえるべき、硬軟を使い分

勢力の言動を偏向、フェイク、さらには「非国民」として全否定するといったものが、社会の二項対立が激化したのは、まさに第1次政権以降と重なる。為政者が率先して対立を煽ることで、分断や差別が正当化され、ヘイトスピーチの嵐は止まり続けている。ネットに限らず一般生活圏においても、気軽に他人を誹謗中傷する状況が広がることも、事実に基づかないイ

ことになっている。自由な言論が必ずしも言論の自由の発揮ではないこと、為政者があえて目を瞑ることは、社会全体の言論表現の自由の価値を大きく低下させた。そうすると、次の段階が自然に訪れる。メディアと市民の距離はますます広がって、政権監視をする社会的役割は否定されることになるからだ。表現の自由の担い手であるジャーナリズム活動が弱体化することは、始め、止めようにも止まらなくなる。この8年、表現規制の動きに市民やメディアが反対するほどに、反対する側の「怪しい感」が広がったり、政府批判に対して「偏向」批判が強まった。りするといったことが起こった。

かつて為政者が自ら手を下したのと同じような効果だが、市民社会の中で生まれる構図ができてきたことだ。分断や批判が、より政権を支える力として

こうした知る権利の前提が開れることは、政策の検証を不可能にし、民主主義社会にとって不可欠の権力監視の力を前送落として、これに直結する。残念ながら、政権交代後も政府自らその姿勢を遂げる可能性は限りなくゼロの予感だ。そうであるならば、変化の鍵は、市民とジャーナリストが握っているということになる。

(専修大学教授・言語学)

(第2土曜掲載)

◆ ◆

本欄の週記書は、本紙ウェブサイトのほか、「原張塔からまこと」(田畑書店)で読むことができます。



安倍政権が強行してきた名護市辺野古への新基地建設に反対の意思を示す市民ら。県独自の緊急事態宣言の解除に伴い、抗議行動を再開している。7日、名護市辺野古の米軍キャンプ・シエラで撮影。

戦後75年

アートつながる

— 沖縄アジア国際平和芸術祭 —

〇〇15

樋口 貞幸

「まどいる」Regen 賞を頂上に複数のキエロ

ひぐち・きたゆき NATURE ART MEETING 04/34アートマシヤ、大阪国立大学都市研究ナザ特別研究員。沖縄アーツカウンシル・プログラムオフィサー。

りて成立している点に特徴がある。いまなお、大きな力に翻弄され続けるこの地において、芸術家たちの大

家が「戦地とはなに」か」という問いについても議論を交わす。「平和」を語る切り口は、継戦や世代

巡らして作品世界を探索する。その自己探求と芸術の醍醐味といえよう。

「まどいる」のメインプログラムである「マニ・ピース・プロジェクト」は、例年6月23日の震災の日には限らない。あるいは作家共、甲子年(1954)の戦後

家たちは「戦地とはなに」か」という問いについても議論を交わす。「平和」を語る切り口は、継戦や世代

新刊紹介

人生を懸けて

クワガタ愛す

「クワガタ」(田村書)

人生を懸けてクワガタを愛する人たちの心と魂を

巡らして作品世界を探索する。その自己探求と芸術の醍醐味といえよう。

夕に懸せられ沖繩真に移住した、クワガタ同士を闘わせるバトルに燃える人々。趣味の範囲を超え、その道にのめり込んだ人々に肉薄する幸福とは、好きという業火に一度も身を投じたかたちかたと言つ著

◆第1巻

小林秀雄賞に与那覇潤さん

琉球

わたしたち

尻を蹴られ

ガス差に押し込まれ

わたしたちの心は

半狂乱の暴君

赤ん坊の泣き

半鐘が乱れ打

砕けた鉄で殴られ

暴れる風に倒された

わたしたちの心は

娘から女を擁

獣の群れ

半鐘は割れる

値札が貼られ

棚に転がされる

わたしたちの心は

鎖は折れ

茶碗は土間に

終わらぬ半鐘

わたしたちの心は

うらぶあーぶじ

踏まれるほろきれ

チャージは

匣は外れて

わたしたち

地平線まで並ぶ、價

値のない死体

みゆき・たかひろ

年に第2回山王口

いまも「ア」な

◆第1巻